



漢方医学教育 SYMPOSIUM 2024

2024年2月10日(土) 15:00~18:30

都市センターホテル

【Web同時配信】

一般財団法人 日本漢方医学教育振興財団
評議員・理事・監事

【評議員】

評議員	佐藤 達夫	東京医科歯科大学 名誉教授 東京有明医療大学 名誉学長
評議員	久保 千春	中村学園大学 学長 前 九州大学 総長
評議員	中谷 晴昭	千葉大学 理事・学長代行
評議員	今井 裕	調布駅前画像診断クリニック 名誉院長 東海大学 名誉教授
評議員	河野 陽一	地方独立行政法人 東金九十九里地域医療センター 理事長
評議員	久光 正	昭和大学 学長
評議員	町田 吉夫	日本漢方生薬製剤協会 常務理事

【理事】

理事長	伴 信太郎	中津川市地域総合医療センター センター長 愛知医科大学 特命教育教授 名古屋大学 名誉教授
専務理事	松村 明	茨城県立医療大学 学長 筑波大学 名誉教授
常務理事	三瀨 忠道	福島県立医科大学会津医療センター 漢方医学講座 特任教授
理事	北村 聖	公益社団法人 地域医療振興協会 顧問 東京大学 名誉教授
理事	田妻 進	JR広島病院 理事長・病院長 日本病院総合診療医学会 理事長 広島大学 客員教授・名誉教授
理事	小西 郁生	国立病院機構京都医療センター 名誉院長 京都大学 名誉教授
理事	林 純	九州大学 名誉教授 日本病院総合診療医学会 名誉理事長・最高顧問
理事	渡辺 毅	東京北医療センター顧問 (老健施設長) 日本専門医機構 理事長 福島労災病院 名誉院長・福島県立医科大学 名誉教授
理事	岩瀬 鎮男	滋賀医科大学 理事 (総務・財務・施設担当) 副学長・事務局長
理事	木村 容子	東京女子医科大学附属東洋医学研究所 所長・教授
理事	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
理事	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
理事	蓮沼 直子	広島大学大学院医系科学研究科医学教育学 教授 広島大学医学部附属医学教育センター センター長
理事	及川 哲郎	東京医科大学 教授 東京医科大学病院 漢方医学センター センター長
理事	濱口 眞輔	獨協医科大学医学部 麻酔科学講座 主任教授
理事	今田 明人	株式会社ツムラ 執行役員

【監事】

監事	永沢 徹	永沢総合法律事務所 代表弁護士
監事	小澁 高清	小澁公認会計士・税理士事務所 代表

研究助成選考委員会・委員

委員長 (理事)	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
委員 (理事)	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
委員	長谷川 仁志	秋田大学大学院 医学系研究科 医学教育学講座 教授
委員	山脇 正永	東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 教授 臨床医学教育開発学分野
委員	平出 敦	京都橘大学 教授 健康科学部 救急救命学科
委員	小林 直人	愛媛大学大学院医学系研究科 医学教育学講座 教授 愛媛大学医学部附属総合医学教育センター長・副学長(評価)
委員	喜多 敏明	辻仲病院 柏の葉 漢方未病治療センター センター長
委員	伊野 美幸	聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門 医学教育研究分野 主任教授 聖マリアンナ医科大学 総合教育センター センター長
委員	小松 弘幸	宮崎大学医学部 医療人育成推進センター 臨床医学教育部門 教授 宮崎大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター センター長
委員	間宮 敬子	信州大学医学部附属病院 信州がんセンター緩和部門 教授

教材委員会・委員

委員長 (常務理事)	三瀨 忠道	福島県立医科大学会津医療センター 漢方医学講座 特任教授
委員 (理事)	蓮沼 直子	広島大学大学院医系科学研究科医学教育学 教授 広島大学医学部附属医学教育センター センター長
委員	新井 信	東海大学医学部専門診療学系漢方医学 教授
委員	高山 真	東北大学大学院医学系研究科漢方・統合医療学共同研究講座 特命教授
委員	網谷 真理恵	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 地域医療学分野 准教授

(敬称略・順不同)

< 2024年2月1日現在 >

漢方医学教育 SYMPOSIUM 2024 プログラム

シンポジウム

15:00 - 18:30

■ 開会のあいさつ

日本漢方医学教育振興財団 理事長 伴 信太郎

■ 表彰式<研究助成・業績表彰> 15:05 - 15:20

日本漢方医学教育振興財団 理事長 伴 信太郎

2023年度「採択・受賞者表彰」

■ 受賞講演 15:20 - 16:05

座長: 日本漢方医学教育振興財団 専務理事 松村 明
日本漢方医学教育振興財団 常務理事 三瀧 忠道

功労賞

「漢方医学この50年とこれからの教育」

証クリニック 総院長 / 日本東洋医学会 前会長・現監事 / 日本東洋医学サミット会議 議長 伊藤 隆

奨励賞

「参加型漢方医学教育の推進」

富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座 教授 貝沼 茂三郎

「医学生を対象とした漢方医学教育入門編の開発と検証」

横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学教室 准教授 伊藤 亜希

■ 漢方医学教育研究助成<2021年度研究助成最終報告会> 16:05 - 16:55

座長: 秋田大学大学院医学系研究科 医学教育講座 教授 長谷川 仁志

日本漢方医学教育振興財団 理事 濱口 眞輔

<一般研究>

1. 「がん支持医療におけるエビデンスに基づいた漢方活用の教育コンテンツ作成と実践」

広島市立広島市民病院 血液内科 部長 西森 久和

2. 「漢方講義テキストを用いたチュートリアル漢方教育の設計と知識定着における検証」

東京大学大学院医学系研究科 老年病学 准教授 小川 純人

3. 「ゲーミフィケーションを利用した漢方医学教育」

奈良県立医科大学 教育開発センター 教育教授 若月 幸平

<グループ研究>

1. 「漢方医学教育における舌診の習得のためのプログラム構築」

広島大学病院 総合診療科 助教 河原 章浩

2. 「アクティブラーニングによる症例検討モデル授業ガイド開発研究」

富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座 教授 貝沼 茂三郎

■ **教育講演** 17:05 - 17:35 座長:日本漢方医学教育振興財団 評議員 久保 千春

「医学教育の現状と課題」

文部科学省 高等教育局 医学教育課 企画官 堀岡 伸彦

■ **パネルディカッション** 17:35 - 18:25

座長:東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 臨床医学教育開発学分野 教授 山脇 正永
日本漢方医学教育振興財団 理事 及川 哲郎

「医学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改定版)と漢方医学教育」

～卒前・卒後の一貫した医師育成を目指して～

1. 卒前・卒後における漢方医学教育のあり方を考える

長崎大学病院医療教育開発センター 教授・医師育成キャリア支援室長 松島 加代子

2. 漢方医学教育における総合診療医の役割

順天堂大学医学部 総合診療科学講座 主任教授 内藤 俊夫

3. 地域医療における漢方の実践と教育

飯塚病院 漢方診療科 診療部長 吉永 亮

■ **閉会のあいさつ**

日本漢方医学教育振興財団 評議員 久光 正

(敬称略)

2023年度 表彰者一覧

功労賞

「漢方医学この50年とこれからの教育」

証クリニック 総院長 / 日本東洋医学会 前会長・現監事 / 日本東洋医学サミット会議 議長 伊藤 隆

奨励賞

「参加型漢方医学教育の推進」

富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座 教授 貝沼 茂三郎

「医学生を対象とした漢方医学教育入門編の開発と検証」

横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学教室 准教授 伊藤 亜希

2023年度 漢方医学教育研究助成 採択者一覧

一般研究

「漢方薬の生理機能を理解するための基礎研究室配属実習の構築」

秋田大学大学院医学系研究科 医学専攻 器官・統合生理学講座 教授 沼田 朋大

「漢方医学的な問診トレーニング用チャットボットの開発と応用」

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授 野上 達也

「漢方医学授業を効率よく学ぶための予習動画製作の試み」

日本歯科大学附属病院 内科 臨床教授 矢久保 修嗣

「漢方学習のためのボードゲーム (Kampoker) 開発」

三重大学医学部附属病院 漢方医学センター センター長 (病院准教授) 高村 光幸

「総合内科診療における臨床推論に漢方薬の運用を組み込んだ卒業研修システムの構築」

埼玉医科大学 総合診療内科 東洋医学科兼任 教授 鈴木 朋子

グループ研究

「漢方医学的問診バーチャル患者の開発と医学生の学修効果の検証」

富山大学学術研究部医学系 成人看護学 I 講座 准教授 山田 理絵

「VR (virtual reality) 及び MR (mixed reality) を用いた漢方医学 OSCE教材 及び学修教材の開発」

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 臨床医学教育開発学分野 教授 山脇 正永

(敬称略)

漢方医学この50年とこれからの教育

証クリニック 総院長/日本東洋医学会 前会長・現監事/日本東洋医学サミット会議 議長 伊藤 隆

この50年の漢方医学には大きな変化があった。

漢方薬の主役が煎じ薬から医療用漢方製剤へ、学習内容が傷寒論・金匱要略の読解から148種の漢方製剤に関する知見へそれぞれ変わった。

学習の場は、演者は学生のクラブ活動からであったが、2001年より全国の医学部で講義がなされるようになり、2020年には共通テキストも発刊された。

エビデンスの得られた医療用漢方方剤が多くの診療ガイドラインに採用され、医師の大部分が漢方薬を処方するようになった。その勢いはコロナ禍を経て加速し、Covid-19に対する廉価な治療薬としても使用され、供給調整というこれまでにない事態を生じている。

漢方薬全体の使用量の増加は良いことだけではない。中国から輸入する生薬価格の上昇とは反対に、医療用漢方製剤の平均薬価は40年ではほぼ半減し、製造販売企業数はこの20年で半分以下に減少した。国内の生薬生産は激減し、戦後海外に輸出もしていた人參の生産については壊滅寸前の状態にある。

これらの諸難題を解決していく上での重要なカギは後継者の育成（教育）にある。

日本の医療が薬漬け医療から脱却して、患者 QOLを高め、医療の質向上をはかっていくには、西洋医療の中で伝統医学を活かすことのできる後継者を様々な分野でより多く育成していくことが重要である。

国内生薬生産の振興についても、煎じ薬を処方できる医師が多数育成されれば、生薬の需要を高めることに繋がるはずである。

またわが国の医療行政を担当する部署には漢方医学を一定程度以上習得されている医務官が必要である。

医療制度が西洋医学で統一されているわが国には、漢方医学の学習内容をより客観的に整理していく責任がある。漢方医学が次の世代に受け継がれていくためには、伝統医学的な証に関する理解だけでなく、漢方薬の薬効・薬理・生理を踏まえた教育カリキュラムへと進歩・発展していくことが期待される。

略 歴

- 1981年 千葉大学医学部卒業
- 1981年 富山医科薬科大学附属病院和漢診療室入局
- 1995年 富山医科薬科大学附属病院 和漢診療学講座 助教授
- 1999年 同大 和漢薬研究所 漢方診断学部門 特任教授
- 2001年 茨城県鹿島労災病院メンタルヘルス・和漢診療センター長
- 2014年 東京女子医科大学附属東洋医学研究所クリニック 教授
- 2019年 医療法人社団ひのき会証クリニックグループ総院長

参加型漢方医学教育の推進

富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座 教授 貝沼 茂三郎

飯塚病院漢方診療科在任中から漢方医学的な病態に基づき処方を選択する症例検討会を行ってきたが、2007年の九州大学病院総合診療科着任後は講義に加えて少人数によるグループ学習での双方向性の症例検討会（漢方診断学演習）を導入した。また2012年からは地域医療実習のマネジメントも担当することになり、そこで参加型臨床実習の重要性を実感し、他施設での取り組みを参考にこれまでの見学型の漢方外来実習から腹診に関して学生が診察、所見のプレゼン、指導医の診察、省察という一連の流れをもつ参加型外来実習に変更し、その有用性について報告してきた。

その一方で全国82大学では漢方外来が設置されてないため、臨床の現場で学生が実習できない大学も依然として多いというのが現状である。そこで講義を中心とした授業をどのように工夫すれば学生の漢方医学に対する興味を高め、今後の学びにつなげることができるかが、卒前における漢方医学教育を標準化する上で非常に重要な課題と考え、汎用性の高い効果的な漢方医学モデル授業の開発研究を行い、随証治療を行っている教員による漢方薬が著効した体験談やeラーニングシステムを用いた双方向による漢方医学的な観点からの症例検討などが有用であることを報告した（kainuma et al, 2022）。2021年からは富山大学で九州大学と同様の参加型臨床実習を導入し、脈・舌・腹診の mini-CEXによる評価も行っている。

また双方向によるeラーニングシステムによる症例検討会をさらに発展させた形として、臨床実習中に対面による双方向の症例検討会を実施している。さらに我々はアクティブラーニングによる双方向の症例検討モデル授業ガイド開発研究を行い、症例検討会の指導経験が少ない講師にとっても非常に役立つであろう授業ガイドを作成することができた。今後は我々が行っている参加型漢方医学教育の実践をより多くの大学で取り入れることができるような取り組みを進めていきたい。

略 歴

- 1993年 富山医科薬科大学医学部卒業
1996年 麻生セメント株式会社飯塚病院東洋医学センター漢方診療科 医員
1999年 富山医科薬科大学和漢診療学講座 医員
2003年 富山医科薬科大学和漢診療学講座 助手
2004年 麻生セメント株式会社飯塚病院東洋医学センター漢方診療科 医長
2007年 九州大学病院総合診療科 助教
2012年 九州大学大学院医学研究院地域医療教育ユニット准教授
2021年 富山大学附属病院和漢診療科特命教授
2023年 富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座教授
現在に至る

所属学会

- 日本東洋医学会：専門医、指導医 専門医制度委員会担当理事
和漢医薬学会：評議員
東亜医学協会：理事
日本内科学会：日本内科学会認定内科医、総合内科専門医
日本肝臓学会：日本肝臓学会専門医
日本病院総合診療学会：評議員

医学生を対象とした漢方医学教育入門編の開発と検証

横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学教室 准教授 伊藤 亜希

厚労省がん研究班の調査で、がん診療における漢方医学の学習経験のある医師が3割未満であった結果を踏まえ、神奈川県立産業技術総合研究所では文科省地域イノベーション戦略支援プログラム事業で漢方 e-learningの開発を行なった。開発にあたり医学教育と漢方教育を専門とする8人で構成する委員会を設置した。まず委員会で各領域の編成者を選出し、次に編成者が講義題目と講師を決定した。そして講師によって講義と確認問題が作成された。また大学や病院などの各施設に合わせて講義をカスタマイズして配信できるようにした。

漢方 e-learningを活用した授業を医学部14大学、歯学部1大学、薬学部6大学で実施した。一部は反転授業という授業と宿題の役割を「反転」させる形式で行った。学生は、反転授業の満足度、理解度に高評価を示し、今後も反転授業を取り入れたいと回答(80.7%)した。次に医学教育モデル・コア・カリキュラムを視野に入れた反転授業モデルを構築し、主観的評価の漢方の興味度、客観的評価の出席率と本試験の成績、いずれも従来授業より有意($p < 0.05$)に高い結果となった。

ICT活用授業が主流になる中、一般的にデジタルネイティブ世代の学生の不満としてe-learningの質が挙げられる。学生への調査結果から、学生目線の入門編を開発した。現在、全国の医師、歯科医師、薬剤師など約60人の講師陣による「体系的漢方医学カリキュラム」「漢方の診察」「鍼灸の手技」「学生×若手漢方医」「漢方資料」「漢方クイズ」「薬用植物」「アーカイブ」「入門編」「導入編」コースを配信している。

卒後教育として2施設で研修医を対象に漢方 e-learningを実施しているが、今後は医師にも拡大し、さらにチーム医療の重要性が高まっている現在、様々な医療従事者にも提供する必要がある。さらに、我が国の医療は世界的にも数少ない西洋医学と伝統医学の統合を実践しているため、その有意義性を世界に配信していきたい。

略 歴

学歴

- 1990年 東京理科大学薬学部卒業
- 2022年 東京理科大学薬学研究科薬学専攻博士課程修了

職歴

- 1990年 塩野義製薬株式会社中央研究所入社
- 2000年 町立八丈病院
- 2002年 慶應義塾大学病院薬剤部
- 2005年 青山薬局
- 2013年 神奈川科学技術アカデミー（現：神奈川県立産業技術総合研究所）
- 2022年 横浜薬科大学漢方薬学科

資格

漢方薬・生薬認定薬剤師、スポーツファーマシスト、漢方生薬ソムリエ

学会

日本医学教育学会、日本東洋医学会、日本薬学会、日本漢方協会、東亜医学協会

受賞

第44回漢方研究イスクラ奨励賞

所 属

横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学研究室

医学教育の現状と課題

文部科学省 高等教育局 医学教育課 企画官 堀岡 伸彦

略歴

2005年4月	東京都保健医療公社 多摩南部地域病院で初期研修医として勤務。
2007年5月	厚生労働省入省 保険局医療課で診療報酬改定を担当。
2011年9月	原子力災害対策本部被災者支援チーム医療班で原子力災害被災者の被曝線量の推定などの業務に従事。
2012年12月	厚生労働省 健康局疾病対策課課長補佐で難病改革に従事
2013年4月	厚生労働省から山梨県福祉保健部 健康増進課長として出向。
2015年4月	山梨県福祉保健部参事・医務課長
2016年4月	厚生労働省 医政局医事課課長補佐
2017年8月	厚生労働省 医政局医事課医師養成等企画調整室長
2019年8月	厚生労働省 医政局総務課保健医療技術調整官
2020年1月～	厚生労働省 新型コロナ対策本部医療班併任 (武漢便帰国、ダイヤモンドプリンセス号対応)
2020年8月	厚生労働省 医政局経済課 医療機器政策室長
2022年7月	文部科学省 高等教育局医学教育課企画官

医学教育に関しては他の高等教育のカリキュラムと異なり、文部科学省において医学教育モデルコアカリキュラムを定め、平成13年から六年に一度改定してきており、今回5回目の改定を行っている。このモデルコアカリキュラムは日本医学教育評価機構の評価にも採用されており、全国の医学部で基本的にはこのモデルコアカリキュラムに基づく教育が行われている。漢方に関する教育も平成13年に制定された一回目のモデルコアカリキュラムから記載されており、現在では多くの大学で教育が行われている。

一方現在医学教育・研究に大きな影響を与えているのは医師の働き方改革である。

医学教育・研究の中核を担う大学病院医師は元々長時間労働であったが、さらに平成16年の国立大学独法化以降診療に関わる時間が大幅に増加したことから、医学、保健に携わる教員のみ教育・研究に費やす時間がどんどん減少してきていたところである。来年度からは医師の労働時間に上限規制が定められ働き方改革が推進されることから日本の医学教育・研究に大きな影響を与えることが懸念されている。

そのため、文部科学省でも10年ぶりに抜本的な医学教育・研究に関する政策を検討するために「今後の医学教育の在り方に関する検討会」を開催し新たな政策を展開しようとしているところである。

ここでは漢方のモデルコアカリキュラムでの位置づけだけではなく日本の医学教育・研究の在り方に関する現在の議論の進捗について紹介する。

＜一般研究1＞がん支持療法におけるエビデンスに基づいた
漢方活用の教育コンテンツ作成と実践

広島市立広島市民病院 血液内科 部長 西森 久和

(演題は取り消しとなりました)

〈一般研究2〉漢方講義テキストを用いた チュートリアル漢方教育の設計と知識定着における検証

東京大学大学院医学系研究科 老年病学 准教授 小川 純人

略歴

1993年 東京大学医学部医学科卒
東京大学医学部附属病院研修医(第3内科、老人科)
1994年 JR東京総合病院内科
1996年 日本学術振興会特別研究員
2001年 米国カリフォルニア大学サンディエゴ校留学
2005年 東京大学医学部附属病院老年病科助手
文部科学省高等教育局医学教育課専門官(参与)
2006年 東京大学医学部附属病院老年病科助手(医局長)
2008年 同講師(病棟医長・外来医長)
2013年 東京大学大学院医学系研究科加齢医学准教授
現在に至る

わが国における漢方医学の卒前教育については、医学教育モデル・コア・カリキュラムにおいて漢方医学の記載がある一方で、各大学で独自の卒前教育が実施されている状況である。本研究は、東京大学医学部医学科5年生を対象として、老年病科病棟実習期間中に全国82医学部で漢方医学教育の共通テキストとして作成された「基本がわかる漢方医学講義」(日本漢方医学教育協議会編集)を活用する形で漢方医学教育を実施し、知識定着度、漢方医学への興味の変化等、その教育効果をアンケートにて検証することを目的として行われた。その結果、老年病科臨床実習中に上記テキストを活用した教育の実施前後において、漢方に対する医学生の関心がより高まった点、漢方医学教育の必要性をより認識した点、卒業後に医師になった際に漢方薬の活用(処方)意向がより高まった点など、老年病科臨床実習と同テキスト活用による卒前漢方医学教育の有効性が示唆された。また、同アンケート自由記載欄でも、実習担当症例で用いられていた漢方薬の効能・効果を習熟できた点を含め、漢方医学や漢方薬に対して好意的なコメントが多かった。さらにまた、代表的な漢方薬の構成と効果・副作用、漢方薬が有効であった臨床例、漢方医学の基本理論と診察など、実臨床で役立つ医学知識に対するニーズが医学生の中で高いことが示唆された。本研究を通じて、漢方医学講義テキストと老年病科臨床実習とを組み合わせることで卒前に漢方医学を系統的に学ぶことは、医学教育モデル・コア・カリキュラムに準拠すると共に、将来的な医師・医学者養成の観点からも重要な機会になり得ると考えられる。

〈一般研究3〉ゲーミフィケーションを利用した漢方医学教育

奈良県立医科大学 教育開発センター 教育教授 若月 幸平

略歴

1997年3月 奈良県立医科大学 医学部医学科卒業
1997年5月 奈良県立医科大学 第一外科（現 消化器・総合外科）入局
1999年7月 西奈良中央病院 医員（外科）
2001年7月 奈良県立三室病院 医員（外科）
2003年7月 高井病院 医員（外科）
2004年7月 奈良県立医科大学 非常勤医師（消化器・一般外科、小児外科）
2005年1月 奈良県立医科大学 医員（消化器・一般外科、小児外科）
2009年7月 米国 Brigham and Women's Hospital に postdoctoral fellowとして留学
2012年8月 奈良県立医科大学 助教（消化器・総合外科）
2014年7月 奈良県立医科大学 学内講師（消化器・総合外科）
2020年4月 奈良県立医科大学 教育開発センター 教育教授
現在に至る

日本外科学会：指導医，専門医
日本消化器外科学科：指導医，専門医
日本消化器病学会：指導医，専門医
日本医学教育学会：認定医学教育専門家資格制度コース修了

【始めに】近年、学生の主体的な学習を引き出す手段としてゲームの手法を活用した（ゲーミフィケーション）教育の取り組みが試みられている。

【目的】医学生がゲーム感覚で漢方医学に親しみ・学んでもらうこと。

【方法】①医学科4年の東洋医学の講義を利用、②授業計画書の作成、③学生全員への「基本がわかる漢方医学講義」の貸し出し、④ゲーム的な用語の導入、⑤授業用と自己学習用の課題（クエスト）の作成、⑥グループワークの実施、⑦5件法によるコース前後の授業アンケートの実施（質問1：漢方医学に興味がある、質問2：漢方医学について詳しく学びたい、質問3：西洋医学があれば漢方医学は不要である、質問4：漢方は効きにくい印象がある、質問5：将来、漢方を処方してみたいと思う）

【結果】クエストに関しては、授業内クエストは必須としたので、解答率は93%と高率であった。課外クエストは任意であったが解答率は50.8%であった。授業内クエストの平均得点率は81.9であり、課外クエストは内容が応用的なこともあり平均得点率は66.7%であった。授業アンケートに関しては、コース前後で質問1、2、5に関しては変化が無かったものの、質問4では、漢方の効果の理解が有意に得られ（ $p = 0.02$ ）、質問3では漢方の必要性の理解が得られる傾向にあった（ $p = 0.07$ ）。

【考察】本カリキュラムでは、ゲーム要素である①ゴール（高経験値獲得で上位を目指す）、②ルール（クエストの参加、経験値の獲得方法など）、③フィードバック（クエスト解答直後に獲得経験値が判明。グループ発表後の教員からのフィードバック）、④自発的参加（約半数の学生が自発的に課外クエストに参加。グループワークへの参加）を取り入れることが出来た。

【結語】ゲームの要素をカリキュラムに取り入れ、興味を持たせることにより漢方への興味も深まり、自主的な学習にも繋がったと考えられる。

〈グループ研究1〉漢方医学教育における舌診の習得のためのプログラム構築

広島大学病院 総合診療科 助教 河原 章浩

略歴

広島大学総合診療科に入局し、クリニック、市中病院で研修したのち、治療選択肢を広げるため漢方を学ぶ。広島大学病院漢方診療センターの立ち上げと共に同部署に移籍する。臨床では、鍼灸師と共に慢性疼痛をはじめとした西洋医学のみで症状緩和の得られない病態に対応している。また広島大学にて漢方医学の卒前、卒後教育および漢方薬による臨床研究にも携わっている。

所属

広島大学病院 漢方診療センター

漢方の診断は、望診、聞診、問診、切診により行われる。舌診では、舌の色、光沢、形を評価することで、患者の健康状態や体質などの診断を行う。診断技術の習得は難しく、経験を積んだ漢方医の外来に陪席が必要である。熟練した漢方医が不在の施設では、研修医や医学生が技術を身に着けることは難しい。舌診は、色情報と形態を観察するため、ある程度はパターンを学習することができる。しかしながら、舌診が漢方医師の経験による主観的な評価であることから、明確な指標が存在せず、経験の少ない医師と比べたとき精度や再現性が不明確であることが問題である。こういった課題の解決と、将来AIによる個人診断の実現が望まれていることから近年舌診は画像処理による定量化が進められてきた。既報として積分球や、偏光カメラを用いた撮像法によるものがあるが、特殊な器具を必要とする。

本研究では、画像取得のため第四世代のiPad Airを使用した。iPadは携行性が良く1200万画像、F値1.8のレンズを搭載している。画像全体から舌の抽出を行う際、医療画像分野でも使用されるU-netを使用し、精度の高い画像抽出を行い、専門医により評価した。また舌画像から色成分、舌苔面積成分、舌のずれ、厚みの合計23の特徴量を取得した。この特徴量より、ステップフォワードセレクションにより、最も精度の高い特徴量の組み合わせの選択をした。推定結果と専門医の評価値の誤差を平均絶対誤差で算出したところ、偏光カメラを使用した際と比較し遜色のない平均絶対誤差が得られた。

結果としてiPadによる舌画像から病態推定手法を開発、U-netを用いた舌の自動抽出、また舌画像から取得した特徴量を用いてSVR推定を行った。本研究結果をもとに診断機をiPhoneに搭載させ、漢方医学教育に使用する予定である。

＜グループ研究2＞アクティブラーニングによる 症例検討モデル授業ガイド開発研究

富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座 教授 貝沼 茂三郎

略歴

1993年 富山医科薬科大学医学部卒業
1996年 麻生セメント株式会社飯塚病院東洋医学センター漢方診療科 医員
1999年 富山医科薬科大学和漢診療学講座 医員
2003年 富山医科薬科大学和漢診療学講座 助手
2004年 麻生セメント株式会社飯塚病院東洋医学センター漢方診療科 医長
2007年 九州大学病院総合診療科 助教
2012年 九州大学大学院医学研究院地域医療教育ユニット准教授
2021年 富山大学附属病院和漢診療科特命教授
2023年 富山大学学術研究部医学系和漢診療学講座教授
現在に至る

＜目的＞

我々がこれまで行ってきた漢方医学教育の経験と実績を発展させ、医学教育学の知見を活用しながらアクティブラーニングによる双方向の症例検討モデル授業ガイド開発研究を行う。

＜方法＞

A) 効果的な授業ガイド開発

漢方医学的な病態を体系的に学ぶ事ができるような症例問題を作成する。またその症例問題を用いた富山大学医学部5～6年生の選択実習における症例検討会をすべてビデオ撮影し、録画したものを編集加工して試行授業ガイド（案）を作成する。

B) 有用性の検証

富山大学、九州大学に加え他大学で導入可能な施設を募集し、検証を依頼する。そしてそれら施設からのフィードバックを踏まえて内容を再吟味し、最終的な症例検討モデル授業ガイドを作成する。

＜結果＞

症例問題は陰陽、気血水などをバランスよく考えることができる9症例を作成した。2022年3月～7月に富山大学附属病院和漢診療科選択実習生4名を対象に3名の講師が学生毎に担当症例を変更し、講義を行った。そして学生からのさまざまな解答や質問、さらに各講師の9症例に対する解説を録画し逐語録を作成した。そして研究者間で議論を行い、学生が漢方医学的な考え方について理解を深めるため、双方向による症例検討会を担当する講師用の授業ガイド案を2022年9月に作成した。富山大学を含めて7施設で検証を行い、検証結果を踏まえて授業ガイド案を改定し、2023年10月に再度九州大学で検証を行い、最終的な授業ガイドを作成した。またデモ講義用のDVDも作成した。

＜考察＞

授業ガイドの解説の中に学生の理解を深めるためのQ&Aを多く取り入れたことで検証した施設の多くから講師自身の学びにつながるとのフィードバックがあった。

＜結語＞

症例検討会の指導経験が少ない講師にとっても非常に役立つ授業ガイドを作成することができた。是非多くの施設で活用してもらいたいと考えている。

1. 卒前・卒後における漢方医学教育のあり方を考える

長崎大学病院医療教育開発センター 教授・医師育成キャリア支援室長 松島 加代子

職歴

2003年 5月 長崎大学医学部附属病院第二内科入局、臨床研修医
2004年 9月 長崎医療センター 臨床研修医
2005年 6月 長崎大学医学部・歯学部附属病院 第二内科 医員
2005年 11月 長崎医療センター 消化器内科 医師
2006年 1月 長崎大学医学部・歯学部附属病院第二内科 医員
2010年 4月 三校会宮崎病院 医師
2010年 6月 諫早療育センター 医師
2011年 4月 長崎大学病院 医療教育開発センター 助教
2019年 7月 長崎大学病院 医療教育開発センター 講師
2021年 3月 長崎大学病院 医療教育開発センター・医師育成キャリア支援室 教授

研究歴

2006年4月～2010年6月 長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科
2012年9月～10月 米国 Mayo clinic 短期留学

学会活動 (資格・役職有のみ記載)

日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本消化器病学会専門医・九州支部評議員、
日本消化器内視鏡学会専門医・指導医・学術評議員、日本肝臓学会専門医、日本消化
管学会胃腸科専門医、日本ヘリコバクター学会認定医・代議員、日本レーザー医学会
関西支部評議員、
日本東洋医学会専門医・代議員、日本医学教育学会理事・代議員
医学教育モデル・コア・カリキュラム調査研究

令和4年度改訂版医学教育モデル・コア・カリキュラム (以下コアカリ) が発出された。

キャッチフレーズ「未来の社会や地域を見据え、多様な場や人をつなぎ活躍できる医療人の養成」が
医学・歯学・薬学で共有された。

また、医学教育コアカリでは、10の資質・能力が記載されたが、「総合的に患者・生活者をみる姿勢」
が新設されている。臨床研修においては、専門とする分野にかかわらず基本的な診療能力を身に付ける
ことが求められている。卒前・卒後とも、全人的医療、社会のなかの生活者としての患者をみる視点が重
要であるとの位置づけは変わらない。西洋医学のみならず漢方医学を活用し、統合医療を実践していく
ことは、このような医学教育の背景にも馴染む医療のあり方といえる。

令和4年度改訂版医学教育コアカリでは、平成28年度の現行版にひきつづき、漢方医学に関する項
目が記載されている。したがって、現在、全医学部において、漢方教育は導入されているわけである。一
方、卒後の臨床研修教育においては、とくに漢方診療科がない病院では、必ずしも漢方を教育する機会
は提供されていない。卒前のみでなく卒後もシームレスな漢方教育を展開していくことは、将来の医療人
育成について指導者が意識すべきことと考える。ただし、膨大に増えていく医学知識のなかで、拡大する
だけでなく、教育のスリム化についてもまた、意識しておく必要がある。自施設の漢方教育の現状や課題
を紹介し、今後どのような漢方教育環境を設定すべきか、議論したい。

2. 漢方医学教育における総合診療医の役割

順天堂大学医学部総合診療科学講座 主任教授 内藤 俊夫

学歴及び職歴

1994年3月 名古屋大学医学部卒業
1994年5月 医師国家試験合格
1994年5月 順天堂大学医学部附属順天堂医院 内科 臨床研修医
1997年5月 順天堂大学医学部総合診療科研究室 専攻生
1997年7月 日本内科学会 内科認定医
1998年4月 東京医科歯科大学医学部微生物学教室 研究生
1999年7月 日本内科学会認定 総合内科専門医
2000年9月 順天堂大学にて医学博士(免疫学)の学位授与
2000年10月 米国テンプル大学 神経ウイルス学・癌生物学センター留学(助手) ～2002年3月
2002年4月 順天堂大学医学部総合診療科研究室 専攻生
2002年11月 順天堂大学医学部総合診療科研究室助手
2003年6月 東京都福祉保健局指導第3課 医員
2003年7月 順天堂大学医学部総合診療科研究室 講師
2004年1月 日本感染症学会認定 感染症専門医
2007年4月 順天堂大学医学部総合診療科研究室 准教授
2008年1月 米国メイヨークリニック感染症科留学 (Visiting Clinician ～2008年8月)
2009年1月 日本感染症学会認定 感染症指導医
2009年10月 日本病院総合診療医学会 理事
2010年4月 日本プライマリ・ケア連合学会 理事(～2012年)
2010年5月 厚生労働省 医師試験委員
2011年4月 順天堂医院医療保険室 副室長
2011年10月 厚生労働省 医道審議会 専門委員
2013年5月 順天堂大学医学部総合診療科研究室 先任准教授
2013年12月 聖マリアンナ医科大学総合診療内科 客員教授 併任
2015年10月 順天堂大学医学部総合診療科学講座 主任教授
現在に至る

医学部学生の最大の関心事は医師国家試験に合格することである。この試験において、漢方に関連する問題は過去に10問以上出題されているが、全て「漢方の副作用」が問われている。この状況で、医学部学生は卒業後に漢方薬を使用するのだろうか。

総合診療科は現在最も注目を集めている診療科である。日本の高齢化によりその必要性が高まっており、また、COVID-19パンデミック下では診療の中心的役割を担った。2018年から新たに専門医制度も開始された総合診療科において、どのような漢方教育を行うかは重要な課題となっている。

順天堂医院総合診療科では、COVID-19の後遺症外来を開設しており、多くの患者を漢方薬で治療している。今なお増え続ける後遺症患者に漢方薬の有用性が示されており、同時にこの外来は研修医や専攻医の漢方教育の場ともなっている。

教育におけるデジタル・トランスフォーメーション(DX)の推進も重要なポイントである。実患者での身体診察教育がパンデミックのために難しくなった時期から、我々はVirtual Reality(VR; 仮想現実)を活用した問診・身体診察教育を行っている。これには、学習者の視点や表情を指導者が後から確認できる利点もある。また、医学部学生や医師の知識向上のため、LINEを用いて1日1問の問題を発信するシステムを開始した。問題の分野や対象者の属性ごとの正答率データが集計され、学習効果や知識不十分な分野の解析が可能である。このツール上では、最新の論文を元にChatGPTが作成した解説も提供される。現在、全国の約2,000名が参加している。

「総合診療科で研修をすると初期研修終了時の試験(GM-ITE)の成績が良い」との研究報告がある。漢方医学教育においても、総合診療医に期待されている役割は大きい。

3. 地域医療における漢方の実践と教育

飯塚病院 漢方診療科 診療部長 吉永 亮

略歴

2004年 自治医科大学卒業
2004年 飯塚病院 初期研修
2006年 福岡県立嘉穂病院内科
2007年 新宮町相島診療所 診療所長
2010年 八女市矢部診療所 診療所長
2013年 飯塚病院東洋医学センター漢方診療科
2019年 現職
2021年 九州大学病院総合診療科特別教員(漢方外来担当)

学会活動等

日本東洋医学会漢方専門医、指導医、学術教育委員
日本内科学会認定内科医、総合内科専門医
日本プライマリ・ケア連合学会プライマリ・ケア認定医・家庭医療指導医
医学博士

演者は自治医大の義務年限として、福岡県内の離島と山間地の診療所で各々3年間勤務した。その間に研修日を利用して定期的に飯塚病院漢方診療科で漢方の外来研修を行いながら、積極的に漢方治療を活用して地域医療を行った。地域医療の現場で学んだ漢方治療を実践すると症状が改善する、患者さんともに喜ぶ経験がたくさんあった。その経験が地域医療を行うモチベーションを高め、さらに漢方の面白さ・深甚さに魅了されたことが私の「漢方医」を目指したきっかけである。

現在は総合病院の漢方診療科外来・入院治療、大学病院における総合診療科外来、コミュニティーホスピタルの家庭医外来など、様々なセッティングで漢方治療を行なっている。同時に漢方指導医として、学生、研修医、専攻医と関わることや総合診療・プライマリ・ケア領域への漢方の発信など、漢方教育や普及に携わる機会も増えてきた。今回、演者が経験した離島と山間地のへき地診療所における漢方治療において、両地域で共通して頻用した漢方方剤がある一方で、地域環境の違いが原因と考えられる処方傾向の違いが存在したことを報告する。

また漢方の卒後教育に関して、コロナ禍をきっかけとして、地域医療に従事している自治医大の卒業医師を対象としておこなった「漢方ベースキャンプ(4回シリーズ・Web開催)」の概要や事後アンケートの結果を紹介する。

主催 日本漢方医学教育振興財団

後援 文部科学省 日本医師会 日本東洋医学会
日本プライマリ・ケア連合学会 日本病院総合診療医学会
日本漢方生薬製剤協会 神奈川県立産業技術総合研究所

協力 日経メディカル開発